榕樹文化 第50号

榕樹会　会報 No.50　（2015年　秋季号）

（写真：右上は、杜聡明先生。①②④は現在の大豹社の光景。
③は疎開学園があった大埔国民小学校の現在の建物と門。）

①の岡の左上には巨大な雪山（次高山）が遠方なので微かに見えるが
写真には写らず、肉眼でやっと見える。右上の岩が「大豹」の由来か。）

①

②

④

③

目　次

終戦後日本時代の台湾医学関係施設より中華民国への移転	杜　祖　健	1頁
台湾における民主化と日治期文化芸術の見直し	西川　潤	6頁
日清日露戦争と東郷元帥（1）	土橋　和典	11頁
道化と髑髏（続・唐松家の兄弟）	内藤　史朗	18頁
健 康 ― 私の方法 ―	彭　炳　耀	25頁
戦後台湾史秘話「招かざる客」	周　明　徳	26頁
杜祖健博士「台湾史」連載「70年後に台北大空襲を思う」	杜　祖　健	27頁
杜祖健博士関西講演会（京都・大阪）9月18、19日		37頁
編集後記	編　集　子	38頁

終戦後日本時代の台湾医学関係施設より中華民国への移転

杜　祖　健

1945年8月15日、天皇の玉音放送により、一日で台湾の歴史に大変化が起きた。この変化は台湾にいる日本人も台湾人も予測する所でなかった。

川の激流に翻弄される木の葉の如く、一般民衆には大きい時代の流れに抗することは出来ず、ただそれに従うのみである。

私は父が終戦後、南京にある中華民国政府より命ぜられて、大部分の台湾の医学施設を日本側より接収する大任にあたっていたので、昔を思い出しながらこの文を書く。

台湾が中国に返還されると決まった日から重慶にある国民政府は台湾接収を計画し始めた。

主に日本留学の人達を集めて、やがては台湾に送るように準備を始めた。台北帝大接収のため、重慶の国民政府は地質学で日本留学の羅宗洛を選んだ。医学関係は父杜聡明も誰が接収の責任者であるか、知らなかった。

1945年の11月2日父は南京の国民政府の教育部（文部省）より台湾大学校務委員会委員に任ぜられ、羅宗洛校長より医学部関係接収の全任をまかせるといわれた。又陳儀行政長官より台大医学関係のみならず、日本赤十字社を接収するよう命ぜられた。当時は台湾大学といわず、任命書には台北大学と言っていた。恐らく台北帝国大学の帝国をとって台北大学と呼んだのだと思う。

それで父は台北帝大医学部教授会でその事を知らせた。台湾人の教授は父だけだったので、教授会というと皆日本人の先生であった。父は次のように告げた。（1945年11月13日）

> 私ハ僭越ナガラ此席ヲ借リテ一言御挨拶ヲ述ベサセテ頂戴キタイト思ヒマス。今回台湾ノ光復ニ依リ、台北帝大ノ組織モ変ルコトニナリ、国立台北大学ニナル事ニ決定サレマシタ。11月2日ニ台北大学校務委員会ガ出来、私ガ校務委員会委員長及常務委員ニ任命サレマシテ之カラ色々御世話ニナラネバナラヌト思ヒマス。
>
> 実ハ今迄私ハ今回教育部カラ台湾ニ派遣サレテ来ラレタ大学接収委員羅宗洛先生一行トハ一面識モ無イ次第デスガ、聞イテ見ルト重慶ニ於テハ今迄台湾ノ事ヲ色々調査シテ居リマシテ大学接収委員ガ先日到着後直チニ大学ノ医学関係ノ方面ハ一任スルト内命サレ、今度公式ニ事務ヲ取レト発表サレマシタ次第デアリマス。何シロ今後トモ色々御指導ヲ願ハナケレバナラヌ事ト思ヒマシテ何卒ヨロシク御願ヒ致シマス。
>
> （漢字は当用漢字使用－編者）

1. 接収工作

父が接収責任者になったのは、

台北帝大医学部、医学専門部、附属病院、熱帯医学研究所、日本赤十字、更生院などであった。それで父はその各機関の長官になった。

1. 台湾大学医学院長
2. 台湾大学附設医院長
3. 台湾大学附設第二医院長（これは赤十字病院が接収されて名称が変わった）
4. 台湾熱帯医学研究所所長
5. 台湾省戒煙所所長（これは更生院が接収されて名称が変わった）

それで台湾にある医学の中枢機関は殆んど父がその長官になった。当時父の威光は絶大で、大学病院を父と一緒に歩いていると、医者や看護婦さんが皆立ち止まって父に頭を下げて敬意を表した。父が退職して一緒に病院を歩いたことがあったが、もうその頃には病院で父の事を知らない人も多くなり、そういう事はなくなり、時代の差をつくづく感じた。

台北帝大医学部の接収は一番スムースに行った理由は父はここの教授で皆知り合いであったから問題はなかった。父が感心したのは医学部の事務室に勤務していた沖縄の職員が重要書類があり、他の人に渡すのは安心できないので日本の帰国の前に父に直接渡したいと言い、一つ一つ点検しながら父に渡した。父はその職員の責任感の強いのに感激した。

父は医学部の教員に、個人の書籍は自由に家に持って帰ってもかまわない。公に属する書籍やその他は全て台大医学院に残すよう布告を出した。森於菟先生所管の尊父森鴎外の書籍は個人の所有であるから大学から持ち出しを許可して、蔡錫奎の宿舎に保管させた。

日台講和条約が成立した後、父と蔡先生は荷造りして日本に全部送り返した。それで私が東京文京区の森鴎外記念館に行くと、区長、館長からとても親切にされるのも父のおかげである。

以前父は赤十字病院と関係がなかったが、その接収には林天賜先生、徐千田先生の協力でスムースに行った。徐千田先生は後に台北医学大学を創設された方である。

父が苦労したのは赤十字病院に大量のモルヒネと阿片があり、どう処分するかに迷った。

ある台湾人が病院にモルヒネと阿片があることを知り、父にそれをくれと言い、売ってはいけないのだと言うて追っ払った。その時私は家にいたので、その台湾人にどなりつけるのを見て又聞いた。結局は父は恒春に行く途中の海に捨てて処分してしまった。更生院の阿片も処理に困り、淡水河に小舟を出して河中に捨てて解決した。台湾人にも悪い奴がいることは上の例でもわかる。

2. 日本人教授の留用と台湾人による医学院建設

台大医学院院長となった父は、台湾人による医学院の建設が第一の仕事であった。接収した日から日本人の教職

員は職がなくなった。

台北帝大医学部時代は父が唯一の台湾人教授で、助教授が台湾人一人、後は皆日本人である。台湾人は助手でもなく、その下の副手であった。台北帝大医学部卒業の台湾人は、３～４年しか経っていない。教授にするには無理である。それで父は医学院の建設には日本人の教員は不可欠であると思った。それで日本人を教授として、次に台湾人を副教授や講師にする事にした。日本人教授としても都合がよかったのはこれで生活が保障されたからである。それで父は日本人の教授・助教授を皆留用した。職員や看護婦は別に日本人でなくても台湾人でまかなえるので、これらの人は留用しなかったので、すぐに日本に送還された。

大体次のようになった。

解剖学系
　教　授:森於菟，金関丈夫（日本人）
　副教授：余錦泉，蔡濯理
　講　師：蔡錫奎
　副教授：彭明總

細菌学系
　教　授：武田徳晴（日本人）
　副教授：詹湧泉

寄生虫学系
　教　授：横川（日本人）

薬理学系
　教　授：杜聡明，
　　上田英之助（日本人）
　副教授：李鎮源

生化学系
　教　授：なし
　副教授：董大成，徐千田

法医学系
　教　授：なし
　副教授：蕭道応

台大附設医院も同じく教授は日本人、副教授は台湾人を起用して体制を整えた。

内　科
　教　授：小田俊郎（日本人）
　　桂重鴻（日本人）
　副教授：林天佑

外　科
　教　授：澤田藤一郎（日本人）
　　河石九二夫（日本人）
　副教授：徐傍與 → 徐傍興 ㊟
　　林天佑

皮膚科
　教　授：高橋（病死）（日本人）
　副教授：謝有福
　　陳登科

眼　科
　教　授：茂木　宣（日本人）
　副教授：邱林淵
　講　師：胡金麟

耳鼻科
　教　授：上村親一郎（日本人）
　副教授：杜詩錦
　　洪文治

婦産科
　教　授：真柄正真（日本人）
　副教授：邱仕檠

精神科
　教　授：有中修三後に林宗義
　　（日本人）（台湾人）

こういう風にして辛うじて医学院の

体制をこしらえた。

父が私に話したのは「今日本人の助教授以上の人に留用して頂いて、その間に台湾人の教員を徐々に昇進させる。台湾の人はまだ若く、医学部を卒業して3－4年しか経っていない」であった。それで日本人の助教授以上の人達を留用したのであるが、私は教授の名前しか知らず、助教授は誰かわからないので氏名をのせなかった。私が、1969年奄美大島から鹿児島に寄った時、鹿児島大学医学部長の佐藤先生が空港まで出迎えに来て下さった。大学に行くと教授会があり、皆佐藤先生を待っていた。私が鹿児島に3時間ばかしあり、東京行きの飛行機を待つ間、佐藤先生は旅行案内のタクシーを1台呼んで下さり、案内の若い女性が私のために鹿児島を廻って説明してくれた。私は佐藤先生にはじめてお会いし、どうしてこんなに親切にしてくれるのか不思議に思った。佐藤先生は「台北帝大医学部の助教授の時、終戦後杜聡明先生に留用させて頂き、大変お世話になり、今でも感謝しています」とおっしゃっていた。それではじめて私が鹿児島で親切にされていたかわかった。

父としては日本人の先生達に留用して頂き、その間に若い台湾人の研究者、助教授（副教授）や講師を指導訓練して頂くつもりであった。しかし1947年台湾で２・２８事件が発生し、社会秩序が乱れ、多くの台湾人が殺された。それを見て日本人の先生達は台湾に居残ることが恐くなり、皆留用をやめて日本に帰国した。日本人の留用教授がいなくなった後は、台湾人の先生達を「教授」に昇格させざるを得なかった。それで台湾では当時、こういういきなり教授に昇格した台湾人の先生を「ポッダム教授」と呼んだ。

それで留用された日本人先生が帰国する前に父は送別会を開いて送った。1947年4月15日である。この送別の辞が杜聡明言論集に残っているので、そのまま写してこの文を閉じます。

日籍教授還国送別会致辞（杜聡明院長より）
民国35年1947年4月15日発起人代表55歳

甚だ僭越ですが私は発起人を代表しまして一言御挨拶申上げたいと思ひます。今回日籍職員が近く日本へ御帰国されますので吾吾が一夕ゆっくり御歓談申上げ送別の意を表したいと思ひまして、茲に粗宴を設け御招待申上げましたところ、各位に於きましては御準備に御多忙にも拘らず、態々御繰合せの上小田教授を始め各位揃って御光臨を賜はれましたことは誠に有難いことで厚く御礼を申上げます。就きましては吾吾は各位と職を同じうし、親しく御厚誼を御願ひ申上げて居るので、急に大勢御帰

りなされることは誠に惜別の情に堪ゆませぬ。私は民国19年漢口へ行った時、独逸の租界が中国に還付されたことを目撃し、2,3年前上海へ参り、上海の英租界及び仏租界が中国側が管理して居ることを目撃しました。台湾が現代文化と交渉する様になったのは17世紀の初頭と思ひますが、実際現代文化が本統（原文のまま）に輸入され、現代施設が本統に始つたことに就いては、二つの事実を挙げることが出来ると思ひます。第1に英国及び「カナダ」宣教師が台湾に伝道に来られ、宗教を広めると同時に西洋文化、殊に西洋医学が入って来ました。殊に第2の事実として最近50年間に於ける日本統治時代の文化である。政治的には色々の考え方もありませうが、併し台湾に日本文化が入り、又日本を通して西洋文化が入り、茲に台湾の文化水準が非常に高められ、組織ある系統的教育がしかれ、殊に世界中の大学に比べて遜色のない台北帝国大学が台湾に出来、之が光復と共に台湾に於ける文化の中心となり、之が中国新建設の原動力となり得ることは吾吾は非常なる敬意と感謝の念を表したいと思ひます。此意味に於いて今夕茲に居られる各位は或は教授とて、或は副教授とし、或は事務を担当され、或は教室の一員として長きは30年以上、或は20年間も大学の前身たる台北医院、台北医専時代から御精勤され、今日の文化の基礎を御築き下さしたことは誠に感謝に堪ゆまぬ。各位の台湾文化に尽くされた御功績は永遠に残ることと信じます。

次に私の愚見に依りますと外国人との交際に就いては凡そ三つの立場があると思ひます。第1に個人間に於ける交き合いの場合で之は周囲の環境が如何に変化するとも其友誼及び態度を変えるべきでないこと。第2に国民として御互に所属の国家の立場が違ふ場合があり、其時には断然敵対行為を取らねばならぬことがある。第3に併し更に進むと人類愛の立場がある、即ち世界大同主義から出発して人類の福祉増進の為めに吾吾は御互に何等かの貢献をせねばなりませぬ。此意味に於きまして之れから御互に御別れ致しますので、住む場所及び勤める機関が違ひますが何卒今後とも変らざる御交誼を賜はるる様御願ひ申し上げます。何卒皆様各位に於かれましては平安無事に御帰国の上益益御健康あらせられることを心から御祈り申し上げます。甚だ簡単で御座いますが以上を以て御送の辞と致します。

（漢字は当用漢字使用。原文はカタカナだが平仮名とした－編者）